オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

2026

Vol.14

原点回帰と未来への挑戦。
新たなフィールドで
若き情熱を導く、
医師たちの覚悟

［特集］継承される、医のこころバトン

Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で
医師のキャリアを考えるマガジン

沖縄で活躍する医師たちを通して

沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン『ムルウチナー』。

『ムル』は全部、『ウチナー』は沖縄を意味します。

今号は、新体制となった琉球大学病院と沖縄県地域医療支援センターの

リーダーたちにフォーカスした「継承と進化」の物語。

なぜ、沖縄で学ぶ医師は強いのか。なぜ、この地で医師を育てるのか。

物理的な拠点の刷新だけではない、その奥にある「人を育てる土壌」の進化。

先人たちが築いた礎の上で、未来の医療人へとバトンをつなぐ

“沖縄”の熱い想いをお届けします。

INDEX

2026. Vol.14

[特　集]

継承される、医（こころ）のバトン

原点回帰と未来への挑戦。新たなフィールドで若き情熱を導く、医師たちの覚悟

Top Interview

P.02 共に新しい医療を築き、共に沖縄の未来を創る。琉球大学病院は新たなステージへ——
琉球大学病院 病院長 鈴木 幹男 先生

Special Interview

P.06 沖縄初、高度救命救急センターの開設と、「地域枠」からの教授輩出を目指して
#1 琉球大学病院 副病院長 ／ 臨床研修センター センター長 ／ 救命救急センター センター長 ／ 琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座 教授 梅村 武寛 先生

P.08 一人ひとりの理想のキャリアを叶え、沖縄県の医療の未来を守る
#2 琉球大学病院 沖縄県地域医療支援センター 副センター長・特命教授 原永 修作 先生

Muru Uchina TALK SESSION 教授×医学生 スペシャル座談会

P.10 地域枠は、選ばれし“特待生”琉球大学の優れた卒前教育で沖縄の医療を担う主役となる医師に
琉球大学医学部 医学教育企画室 特命教授 金城 紀与史 先生
琉球大学医学部 医学科5年生 松堂 太軌さん ／ 細田 まあれさん

Muru Uchina Residents Story

P.14 やりがいもキャリアも多彩な救急 若い組織を大きくする醍醐味もある
#1 琉球大学病院 救命救急センター 特命助教・外来医長 松平 綾 先生

P.15 島医者に必要なのは“完璧さ”ではなく医師としての“当たり前の姿勢”
#2 沖縄県立八重山病院附属 西表西部診療所 所長 波平 郁実 先生

P.16 沖縄を愛する「地域枠」医師として沖縄の救急医療の発展を担う
#3 琉球大学病院 救命救急センター 専攻医 城間 恵介 先生

Muru Uchina

Top Interview

共に新しい医療を築き、共に沖縄の未来を創る。琉球大学病院は新たなステージへ——

琉球大学病院 病院長 **鈴木 幹男** 先生 Mikio Suzuki

2025年1月に新築移転し、新たなステージを歩み始めた琉球大学病院。耳鼻咽喉・頭頸部外科の教授であり、2025年4月から病院長として新病院の舵取り役も担う鈴木幹男先生に、新病院のコンセプト、目指す医療、そして沖縄の地で医師としてのキャリアを築く意義を聞いた。

2025年1月、琉球大学病院は中頭郡西原町から宜野湾市西普天間に新築移転し、新たなステージへと進んだ。

新病院に生まれ変わった琉球大学病院は、ひらけた空を背景に地上14階建ての真新しい白亜の意匠が映え、沖縄の新たなランドマークとして県民から注目され、期待されている。高台に建つ新病院から眺めるエメラルドグリーンの東シナ海と、広大な碧い空とのコントラストは美しく、宜野湾から吹く優しい海風も心地良い。

新病院が目指すのは、【医療水準の向上】【人材育成】【先端研究・産業振興】【国際化】を4つの柱として沖縄の未来の医療を築き、沖縄から全国、そして世界へと発信していくことだ。

新病院を牽引する、2025年4月に病院長に就任した耳鼻咽喉・頭頸部外科の教授である、鈴木幹男先生は新病院の機能についてこう語る。

沖縄県の“最後の砦”として救急・重症系医療を強化

「当院は県唯一の大学病院であり、島しょ県という沖縄特有の自己完結型医療における〝最後の砦〟。旧病院にはなかったヘリポートが新設され、診療面では検査から治療まで1室で対応可能なハイブリッドERを導入した救命救急センターや、HCU、ICU、GCU、NICUなど重症系医療を強化しました。病床数も600床から20床増床し、増床分は救急にあて、これらを支える中央診療部門の体制も整備。手術室も拡充し、ハイブリッド手術室や最新の手術支援ロボット、術中MRIといった高機能手術室を完備するなど、沖縄県初の〝高度〟救命救急センター化に向けた準備を整えました」

新病院から見える風景には、鈴木先生が憧れていた沖縄の美しい景色が広がっている。〝海なし県〟である滋賀県で育った鈴木先生にとって、沖縄県は憧れの地だった。1975年開催の沖縄国際海洋博覧会で沖縄に興味を持ち、沖縄の碧い海と空、そして赤いハイビスカスが風に揺れる航空会社のCMを目にする度に、「いつかは沖縄に」と憧憬の念を抱くようになる。滋賀医科大学の耳鼻咽喉科で長く活躍してきた鈴木先生は、琉球大学の教授公募を目にして迷うことなく応募。2006年に琉球大学耳鼻咽喉・頭頸部外科の教授となり、以来、沖縄県の臨床・研究・教育に尽力。耳鼻咽喉・頭頸部外科では、めまい・難聴などの神経耳科疾患

モットー
千里の道も足下から

好きな郷土料理
なーべーらーの味噌煮

オススメのスポット
今帰仁村（美ら海水族館周囲）

OFFの過ごし方
ゴルフ、ドライブ、映画館

沖縄の魅力
碧い海と空があり、暖かい時期が長いこと。人のつながりを大切にしている方が多く、患者さんとの距離が近い。

Interviewee

鈴木 幹男 先生

Mikio Suzuki

Title

琉球大学病院 病院長
沖縄県地域医療支援センター センター長
琉球大学大学院医学研究科
耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座 教授

Profile

滋賀県出身。専門分野は耳鼻咽喉・頭頸部外科。1986年に滋賀医科大学医学部卒業後、同附属病院の耳鼻咽喉科に進む。1995年、米国テネシー州立大学医学部免疫アレルギー科、1999年、滋賀医科大学医学部耳鼻咽喉科講師、2005年、福岡記念病院耳鼻咽喉科部長を経て2006年に琉球大学医学部 高次機能医科学講座耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野（現・琉球大学大学院医学研究科耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座）教授。2015年、琉球大学病院副院長、2025年、琉球大学病院病院長に就任。

から悪性腫瘍まで広い守備範囲をカバーし、人工内耳手術を可能とする県内唯一の医療機関として県民の期待に応えている。

●

鈴木先生が院長として最優先に取り組んでいるのが「医療人材の育成」だ。県唯一の医育機関としても重要な使命であり、優れた人材の育成と充足は「医療の質・安全の向上」に不可欠だ。

沖縄県の医療課題は、離島や北部地区における医療人の慢性的な人材不足や医師の診療科偏在である。その解決策の一つとして、医師不足地域の医療を担うことを目的に設立された琉球大学医学部の地域枠は、2019年度から第一期生が勤務を開始している。

優れた医療人の育成と“安心”の確保にも注力

「離島など地域医療を守ることは沖縄県の医療を守ること。地域で活躍できる人材育成はもちろん、地域医療に従事義務のある地域枠医師の不安を取り除き、サポートすることも非常に大切です」

医師一人体制の離島診療所などでは、いつでも指導医や上級医に相談できるなど〝安心〟して従事

できる体制づくりも重要であり、琉球大学病院ではICTを活用した遠隔診療や地域医療連携も推し進めている。

沖縄で育つ医師の卵たちに、いかにして〝地域医療に興味を持つ〟ための教育ができるかどうかも、沖縄の医療を守るための一つの大きな鍵となる。

「早期から地域医療を体験し、離島などで活躍するロールモデルを目の当たりにすることで地域医療への関心を高め、将来のキャリアもリアルに描くことができる。医学生にはEarly Exposure（早期体験学習）として低学年から外来付き添い実習や救急車添乗などを実施するほか、地域医療の実際を知るために離島実習も行い、4年次秋から始まる臨床実習では地域医療を担う病院も選択できるようにしています」

●

鈴木先生は、優れた医師を育てるためには〝みる・知る・実行する〟の3つが不可欠だと語る。〝みる〟は人を診る、多くの手技や手術を経験する（見る）こと。〝知る〟は、臨床疑問を突き詰め自分で学習すること。〝実行する〟は実際に手技・手術や研究・発表を行うことを指す。

「常にこの3つをバランス良く繰り返していくことで、できることが着実に増え、それが医師としての自信となり、より高みを目指す好循環も生まれる。これによって思慮深い優れた医師へと成長できるはず」

鈴木先生が教授を務める耳鼻咽喉・頭頸部外科では、県外で研鑽を積むことも奨励している。

「外と交わることでさらなる成長ができる。全国で仲間をつくり、多様な考え方を吸収し、それを沖縄に還元することで、沖縄の医療がさらに進化する。県外や国外の医療も学ぶなど広い視野をもつ

沖縄県全体で医師を育て キャリアをサポートする

医療人の養成と活躍は沖縄の医療の発展に重要です。琉球大学病院ではハワイ大学やアジア圏の大学との連携など〝国際化〟による視野の広い医療人の養成も目指しています。直ぐ近くには在沖縄米国海軍病院もあり、米国医療を学べることも特徴です」

沖縄の未来の医療を切り拓くためには、研究の充実も欠かせない。医師教育には研究機能も重要な要素であり、琉球大学病院に隣接する「先端医学研究センター」では、臨床研究の体制整備や再生医療への取り組みを進めている。

「医療の世界は日進月歩であり、常に自らの診療をアップデートするためにはリサーチマインドの涵養も重要。患者さんに最良の医療を提供するためには、常に新しい情報に接し、取捨選択していく必要がある。この能力を養うためには研究の素養も不可欠です」

大学病院には、高度医療の提供、新しい医療技術への挑戦、将来を担う優れた医師の育成といった重要な使命があるが、これらを単独で実現するのは不可能であり、琉球大学病院では県内の各医療機関や医師会との人的交流も含めた連携にも注力。診療のみならず医学生・医師教育にも積極的に関わり、沖縄県全体で優れた医師を育てることにも取り組んでいる。

「琉球大学の医学科学生の受け入れ開始は1981年。現在、県立病院の半数の医師は琉球大学出身者であり、全国の医師会の中で最も年齢の若い会長としても注目されている沖縄県医師会会長の田名毅先生も琉球大学出身。沖縄県は医師会活動も活発で、県全体で医師を育てようという気風にあふれている。医師同士のネットワークやコミュニティを築きやすい環境は、診療サポートはもちろん、目指すロールモデルを見つけやすく、キャリアサポートとしても大きく寄与しています」

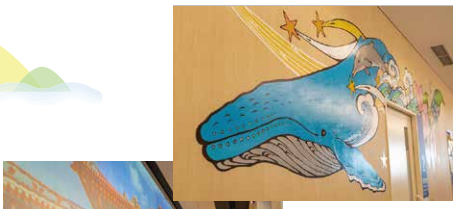
●

琉球大学病院は、「医師の働き方改革」施行前から働き方改革に取り組んできた。カンファレンスや

Hospital Data

琉球大学病院

〒901-2725
沖縄県宜野湾市字喜友名1076番地
TEL:098-894-1301
https://www.hosp.u-ryukyu.ac.jp



会議は勤務時間内に行い、変形労働制やチーム医療への移行を進め、新病院となり出退勤管理もビーコンによる勤怠打刻を導入するなどデジタル化を推進。ハード面の充実や、フロア面積の拡大、導線も整備されたことで仕事の効率化と安全性も向上。院内随所に沖縄出身作家のアートが描かれるなどホスピタリティ面も充実した。病後児保育所も完備しており、子育て中の医師も働きやすく、復職もしやすい環境にある。

「各種休暇の取得も推進しています。沖縄県全体に言えることですが、生活の質を大切にする風潮があり、医師一人ひとりに適した勤務体制や研究環境が得やすいことも魅力。男性医師であっても育休を取得しない先生の方が珍しくなっています。診療を終えて釣りをしたり、ゴルフをしたり、それが日常であることも特性。働きがいと働きやすさを同時に獲得できる環境です」

さらに、医師として大きく成長する場としても沖縄県は最良の環境と風土があると鈴木先生は自信をもって言う。

「沖縄には医療資源の少ない地域が多く存在しており、若い医師でも住民から歓迎され、医療の中心的役割を担うことも許容されてきた歴史的背景がある。住民は医師への親近感があり、若い医師に診られることに抵抗がないため実践経験を豊富に積むことができる。また、県立中部病院が築き上げた伝統の〝屋根瓦式教育〟は大学病院にも根付いており、指導体制の手厚さも特徴です」

鈴木先生の座右の銘は「千里の道も足下から」。どんなに遠い道のりも、何事かを成し遂げるのも、最初の一歩を踏み出さなければ始まらない。そして日々の一歩一歩の地道な努力こそが、確かな歩みとなる――。

沖縄県には若手医師が挑戦できる環境があり、それを県や病院、住民が後押しする風土もある。医師としての大きな第一歩を踏み出すのに、沖縄県ほど最良の場所はないだろう。

新しくなった大学病院で新しい医療を共につくる

「新しくなった大学病院、学舎で共に学び、共に新しい医療を創っていきましょう」と、鈴木先生は熱いメッセージを送る。新病院で、沖縄の医療の新たなステージを築く主人公の一人になる。それもまた琉球大学病院でキャリアの一歩を踏み出す大きな魅力だろう。

Q. 鈴木先生にとって沖縄とは？

A. 人と人とのつながりを大切にする場所。

Special Interview #01

沖縄初、高度救命救急センターの開設と、「地域枠」からの教授輩出を目指して

琉球大学病院 副病院長
沖縄県地域医療支援センター 副センター長
臨床研修センター センター長
救命救急センター センター長
琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座 教授

梅村 武寛 先生 Takehiro Umemura

沖縄の救急医療体制の再構築に力を注ぐ

琉球大学病院救急科の2代目教授である、梅村武寛先生のトレードマークは笑顔だ。時折、博多弁を交えながらカラカラと笑う朗らかな表情は、周囲を自然と明るくする力を持っており、だからなのか救命救急センターには若々しいエネルギーが満ちあふれている。

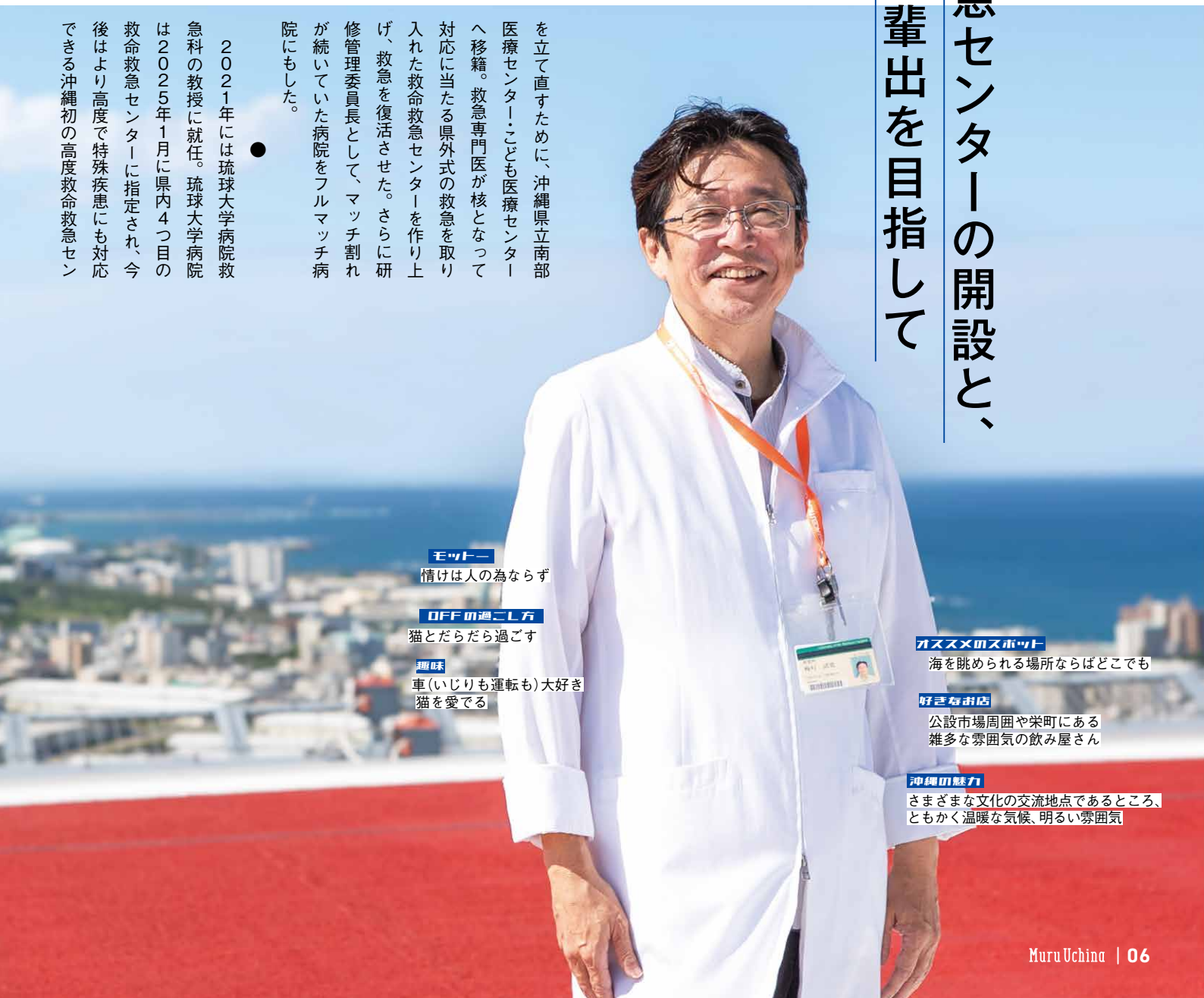
梅村先生は副院長や研修管理委員長として若手医師の教育・研修も担当し、地域医療支援センター副センター長として地域枠のキャリアサポートにも取り組む。「当院をフルマッチ病院にすること。そして地域枠から教授を輩出したい」と、梅村先生の言葉に力がこもる。

医師人生を熊本大学の整形外科でスタート。3年目には天草の島医療に携わった経験も持つ。2002年には救急に転科し、福岡大学病院救命救急センターにて重症多発外傷にも対応できる〝手術をする救急医〟として活躍。医学生や研修医、救命士の教育にも携わった。

2014年には、崩壊した救急を立て直すために、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターへ移籍。救急専門医が核となって対応に当たる県外式の救急を取り入れた救命救急センターを作り上げ、救急を復活させた。さらに研修管理委員長として、マッチ割れが続いていた病院をフルマッチ病院にもした。

●

2021年には琉球大学病院救急科の教授に就任。琉球大学病院は2025年1月に県内4つ目の救命救急センターに指定され、今後はより高度で特殊疾患にも対応できる沖縄初の高度救命救急セン



モットー
情けは人の為ならず

OFFの過ごし方
猫とだらだら過ごす

趣味
車（いじりも運転も）大好き
猫を愛でる

オススメのスポット
海を眺められる場所ならばどこでも

好きなお店
公設市場周囲や栄町にある
雑多な雰囲気の飲み屋さん

沖縄の魅力
さまざまな文化の交流地点であるところ、
ともかく温暖な気候、明るい雰囲気

ターの指定を目指す。

「沖縄県は全ての患者さんを受け入れるER型救急が特徴ですが、コンビニ受診の割合が高いのが課題。各医療機関があるべき機能を担い、救える命を確実に救うため、琉球大学病院が既存の救急病院のバックアップ施設となり、また、県立病院との連携強化や人的交流のハブ施設となることで、県全体の救急医療のレベルアップと均てん化の実現を目指しています」

そうした体制づくりの要となるのが人材育成だ。人材の教育と成長において〝安心〟であることは大切な要素であり、梅村先生は万全のフォロー体制で若手医師たちの経験と学びを後押ししている。

人材育成・教育・交流に注力 沖縄の救急のレベルアップへ

「若手医師を一人で診させることは決してありませんし、他科へのコンサルトでも何かあれば必ず僕や指導医が対応する体制を徹底しています」

梅村先生は若手医師の顔を見れば必ず話しかけるようにしている。その一言は見守られているという安心感にもつながるはずだ。また、組織・診療科の横断的な催し物を企画するなど、垣根を越えた交流にも注力している。

「クルーズ船を借り切ってみんなで海に行くなど、他科の先生たちとも交流を深めています。それによって診療科間の患者さんのやり取りも円滑になる。救命救急センターの飲み会もオープンにしていますし、南部医療センターの救急とも交流を図っています」

座右の銘は「情けは人の為ならず」。他人への親切が自分にも良い影響を及ぼすという意味だ。この言葉はチーム医療や他科との連携においても重要なキーワードとなる。救急科では20床の専用病床をもっており、他科から患者が下りてくるなど、頼られ、相談されることも多い。

「そんなとき、快く親切に対応することで他科との円滑な連携を築くことができる。それは医療の質の底上げにもつながります」

沖縄県は時間外の救急受診者数が多く、若手医師であっても実践的な診療機会が豊富にある。住民も若手医師の診療に抵抗はなく、医師育成に協力的だ。さらに、陸続きではない沖縄県は『ここで医療を完結させなくては』という高い医療レベルの維持が不可欠な場所。それが顕著な離島医療を経験できることも強みだ。

「離島では全人的で優しい医療が大切だと言われますが、患者さんの話をよく聞き、優しくすることは〝当たり前〟のこと。しかもそれで病気が治るわけでもない。離島医療は生易しいものではなく、症例が集まる基幹病院での修練は絶対に必要。また、離島に居続けても成長はできません。基幹病院と行き来できる体制も重要であり、沖縄はそれを可能とするキャリアアップに優れた特別な場所なんです」

梅村先生は、現在でも離島で働きたいと言う。医師3年目に経験した島医者の〝楽しさ〟を知っているからだ。

キャリア形成に優位な沖縄県 後進育成も「地域枠」の役割

「すごく歓迎され、近所の人が魚をもってくるなど、とても良くしてもらいました。若いうちに離島医療は経験すべきです」

そうした特別な経験もできる地域枠は、制度や義務として使われる存在では決してない。沖縄県の地域医療に貢献するためのキャリアデザインを一人ひとりが考え、キャリアアップしていくことが大切だと梅村先生は声を大にして言う。

「救急科では地域枠の先生でも県外に出てもらう方針。地域枠は、将来の沖縄の地域医療を支える後進の育成も重要な役割です。そのためには県外の医療も経験し、沖縄に足りない医療を知っておく必要もある」

地域枠医師の未来の姿は、沖縄の医療の未来の姿でもある。地域枠から教授を輩出したい――。梅村先生の想いが実現したとき、沖縄の医療は大きく進化しているだろう。

Profile

福岡県出身。専門分野は整形外科・救急。1995年に熊本大学医学部卒業後、同附属病院の整形外科に進む。熊本中央病院や天草中央病院でも研鑽を積み、2002年、救急に転科し福岡大学病院救命救急センター助手、2005年、一般財団法人救急振興財団救急救命九州研修所専任教授、2010年、福岡大学病院救命救急センター講師・医局長を経て、2014年、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの救命救急センター長、2021年、琉球大学大学院医学研究科救急医学講座の教授に就任。2023年から琉球大学病院副院長。

Special Interview #02

一人ひとりの理想のキャリアを叶え、沖縄県の医療の未来を守る

琉球大学病院 沖縄県地域医療支援センター
副センター長・特命教授

原永 修作 先生 Shusaku Haranaga

Profile

鹿児島県出身。専門分野は呼吸器・感染症内科。1996年に琉球大学医学部卒業後、琉球大学第一内科（感染症・呼吸器・消化器内科学）に入局し、沖縄県立中部病院、豊見城中央病院などで研修を行う。1999年、南フロリダ大学に留学。2001年、沖縄県立中部病院、2006年、琉球大学医学研究科感染制御医科学専攻感染病態制御講座助教、2015年、琉球大学医学部第一内科講師、2017年、琉球大学病院総合臨床研修・教育センター特命准教授、2025年、沖縄県地域医療支援センター副センター長・特命教授に就任。

沖縄県地域医療支援センター（以降、センター）は、一定期間、離島や北部地域での勤務義務がある地域枠のキャリア支援と地域医療の充実を両輪でサポート。沖縄県の医療の未来を守る重要な役割を担っている。

2025年、センターの特命教授に就任した原永修作先生は、琉球大学第一内科（感染症・呼吸器・消化器内科）を基本に、県立中部病院や豊見城中央病院で研鑽を積み、3年目には与論島（鹿児島県）での島医者も経験。4年目には南フロリダ大学に留学し、感染症研究にも携わった。帰国後は県立中部病院での勤務を経て琉球大学第一内科で活躍。総合臨床研修・教育センターの特命准教授として若手医師の育成やキャリア支援にも携わった。原永先生は医学生や研修医たちの〝声〟に耳を傾けることを大切にしてきた。医師会や県内研修病院と連携し、「シミュレーショントレーニング」や「おきなわレジデントデイ」「研修医OSCE」といった研修医向け企画の運営に携わり、また、県内研修病院との〝たすきがけプログラム〟を設置。若手医師の育成と個々のニーズを叶えるキャリア支援体制を構築してきた。

個々のニーズを叶える キャリア支援体制を構築

「県内の研修病院と大学病院を1年ずつ研修する〝たすきがけプログラム〟は、現在10もの施設と連携しています。地域枠のキャリアにも選択肢が増えました」

こうした取り組みは徐々に成果を生み、一時期一桁まで減少した初期研修医が、2025年度マッチングでは、定員23名に対しマッチ者は22名まで伸びた。

●

〝声〟を徹底して聞く原永先生の姿勢はセンターでも活かされている。以前から耳にしていた地域枠関連の情報が見えにくいという声を改善するため、センターの特命教授に就任して最初に取り組んだのは、わかりやすい情報発信だ。

「沖縄の医療の現状をわかりやすくしっかり伝え、その上で地域枠としてどういう医師を目指すべきなのかを自ら考えてもらうことも重要。ホームページでは、センターの役割はもちろん沖縄県の医療現状をグラフ化して情報をわかりやすく発信したり、地域枠学生が離島実習で撮った写真を使用して離島の魅力を伝えたり、さらにはSNSによる情報発信も始めました」

琉球大学では2024年度から地域枠学生が早期から離島・北部医療体験を行うなど、具体的なキャリアを描けるよう支援する「キャリア形成卒前支援プラン」をスタートした。離島・北部地域の医療体験を1年次から経験できるインパクトは大きく、地域医療への高いモチベーションを生み出している。早期から地域医療を体験するメリットは他にもある。4年次に行われる臨床実習前の必須実技試験「OSCE」や、プライマリ・ケア演習における患者への接し方においても、1年次からの地域医療での経験値は大きなアドバンテージ

地域医療の価値を高め ブランド化を目指す

となるはずだ。

「地域医療体験の参加者たちのレポートを分析するなど成果検証も重要。〝地域医療を経験する価値を高める〟ため、質と成果を求めブランド化していくことも重要だと考えています」

●

沖縄県は離島医療など、医師としての成長の場として独自性の高い優れた環境がある。沖縄に根付く〝断らない〟北米式ER救急など、豊富で多彩な症例の実践経験や、屋根瓦方式の充実した指導体制も特徴だ。

「他県の大学教授からは、『離島医療が経験できて羨ましい』と言われるなど、沖縄県は特別な経験ができる場所。CTのない場所で自分の実力を試すこともできるなど、挑戦できるチャンスは多い」

地域枠は〝羨ましがられる医療〟を経験できる医師であり、その経験値は長い医師人生における大きな糧となるはずだ。

「一つの場所に居続けると、その環境でしか適応しない偏った医師になり、新しいことも生まれてこない。若いうちからさまざまな場所で医療を経験することで、医師としての幅と深さが生まれる。地域枠はいろんな場所の医療を経験できることも魅力です」

地域枠医師たちのキャリア成功体験を後進に伝えることも重要だ。原永先生はセンターを地域枠学生・医師との情報・意見交換のハブ施設として、交流連携にも取り組む。2025年10月には第一回目の「地域枠交流会」を開催。地域枠医師からのリアルな体験談を学生たちが直接聞く機会は、将来のキャリアを自ら掴む力を育てることにも有効だ。原永先生は力強く語る。

「地域枠」は一人ひとりの理想のキャリアを築く制度

「地域枠のキャリアは決まったレールに乗るのではなく、一定範囲のなかで〝自分のやりたいことをいかにしてできるかを考える〟というもの。離島医療のイメージが強いですが、決してそうではない。県内全体の医療を考え適材適所で活躍することが大切です。たとえば教授になった医師が地域枠だったなど、〝地域枠制度によって理想のキャリアを実現できた〟というカタチをつくりたい」

原永先生は今日も医学生や若手医師の声に耳を傾け、一人ひとりの理想のキャリアを叶えるために尽力する。それは、沖縄県の未来の医療を守ることでもある。

● ムルウチナー特別企画

教授 × 医学生 スペシャル座談会

MURU UCHINA TALK SESSION

地域枠は、選ばれし“特待生”
琉球大学の優れた卒前教育で
沖縄の医療を担う主役となる医師に

質の高い優れた医療者の育成・教育に取り組む、金城紀与史先生と地域枠医学生2名（5年次）によるトーク・セッションを開催。沖縄の医療に貢献できる実力と、一人ひとりの素晴らしいキャリアを叶える沖縄県の卒前教育の強みと魅力に迫った――。

琉球大学医学部
医学教育企画室 特命教授
金城 紀与史 先生
Kiyoshi Kinjo

琉球大学医学部
医学科5年生（地域枠13期生）
松堂 太軌 さん
Daiki Matsudo

琉球大学医学部
医学科5年生（地域枠13期生）
細田 まあれ さん
Maare Hosoda

金城…地域枠は卒業後に医師不足状況にある沖縄県の離島や北部地域への従事義務がありますが、二人はなぜ地域枠で入学しようと思いましたか？

松堂…沖縄県から離れる理由が特になくて。人が優しくて、住みやすくて、家族が近くにいて、そんな大好きな沖縄県で働くことができ、しかも修学資金の支援までしていただけるからです。

細田…私も同じです。地域枠の学生は、沖縄の医療に貢献したいという熱い想いを持って入学しているので、みんな志が高いんですよね。

松堂…学年に関係なく地域枠の交流会や勉強会を開催するなど、高い志をもった仲間とのつながりがどんどん広がるのも良いですね。

細田…実習に行っても、『地域枠です』というと、地域枠出身の先生が必ずいらっしゃるので、直ぐに打ち解けられますし、みなさんすごく良くしてくださる。地域枠ってすごく大切にされているんだなと感じています。

新たな卒前教育プログラムなど成長のチャンスが豊富な「地域枠」

金城…地域枠は、将来、沖縄県の地域医療を担うという、県民の大きな期待を背負っている“特待生”なんですよね。

松堂…地域枠は一般枠とは一部異なるカリキュラムや、地域枠必須のプロジェクトにも参加できるなど、特別な経験をさせてもらっていると感じています。

金城…二人は4年次の2024年9月に【島医者・山医者・里医者育成プロジェクト】の一環で、佐賀県での地域医療実習などを経験しましたが、どうでした？

松堂…佐賀県内の病院を見学したり、佐賀大生と一緒にディスカッションをしたり、特に印象に残っているのは佐賀大生とのワークショップですね。沖縄の離島医療であれば、どのようなタイミングで本土病院へ搬送するかを考えないといけませんが、佐賀県の地域医療といえば山間部の過疎地であり、地続きという特性がある。地域医療の違いを知るなど、新しい学びがあり面白かったですね。

金城…佐賀県は沖縄県より高齢化がかなり進んでおり、今後は医療ニーズがどんどん縮小し、将来、大きな医療機関は佐賀市内だけに集約されるだろうという話もされていました。そうした状況にあるなか、どのような医療の工夫ができるのかを考えたり、沖縄の地域医療との違いを知ったり、みなさん、すごく新鮮な経験を得ることができたのではと思います。佐賀県では医療DX化がかなり進んでいたのには僕も驚きました。

細田…佐賀大学には琉球大学にはない総合診療科があり、カンファレンスに参加して、正しい診断や治療を導き出す“考え方の基本”を学んだことが勉強になりました。それと、佐賀大学の先生から「地域枠だからといって大学院に行かないとか、教授になれないとかで

はなく、そういう道も極めていいんだよ」と話をされたことも強く印象に残っています。視野が大きく広がりましたね。

金城…外の医療を経験することで、新たな視点を得たり、視野が広がったりと、みんな開眼して沖縄に戻ってくる。佐賀大学の医学生も2週間、沖縄で臨床実習をされたのですが、みんなそれぞれに新しい学びを得て、開眼して帰っていく。教える側として、外に出て学ぶ意義の大きさを改めて知ることができましたね。

松堂…佐賀大学の先生は「地域枠はエリート教育だ」とも仰っていました。

金城…その通りです。地域枠は、言うなれば将来Jリーガーになることが約束されているほど才能があり、だから奨学金も出るし、学びや成長のフィールドも多く用意する。地域枠は離島や地域医療への従事が「義務だから仕方がない」ではなく、「地域枠だからこそ大きな力を獲得できるんだ！」という、むしろ成長のチャンスが豊富に与えられた〝特進クラス〟だという意識を持ってほしいですね。

●

金城…離島医療は沖縄の医療の原風景であり、地域枠学生は1年次から離島診療所を体験できることも沖縄ならでは。二人はこれまで何度か離島医療や臨床実習を経験してきましたが、沖縄の医療を体験して印象的だったことは何ですか？

沖縄の離島医療は“助け合いの医療”

松堂…離島実習で印象的だったのが、西表島に行ったとき、空き時間にレンタルバイクを借りて島を一周したのですが、休憩時に島民の方がわざわざ車から降りて、島のことをいろいろと話してくれたんです。島民の方の優しさやフレンドリーさがすごく印象的でしたね。

細田…沖縄県の患者さんはすごく温かくてフレンドリーで、ご家族やお見舞いに来ている人と話す機会も多く、医学生の教育にもすごく協力的ですよね。

松堂…医学生だと説明しているのですが、それでも〝先生〟と呼ばれたり（笑）

細田…〝先生〟と呼ばれるこ

Profile

琉球大学医学部
医学教育企画室 特命教授

金城 紀与史 先生

Kiyoshi Kinjo

［出 身 地］東京都
［出身大学］東京大学（1994年卒）

専門分野は総合内科。大学卒業後、亀田総合病院にて研修、米国トマス・ジェファーソン大病院内科レジデント、マウント・サイナイ病院呼吸器集中治療医学フェロー、アルバニー大・ユニオン大大学院修士（生命倫理）、手稲渓仁会病院を経て2004年から沖縄県立中部病院。2023年、琉球大学医学部医学教育企画室の特命教授に就任。

琉球大学医学部
医学科5年生

松堂 太軌 さん

Daiki Matsudo

［出身地］沖縄県うるま市

琉球大学医学部
医学科5年生

細田 まあれ さん

Maare Hosoda

［出身地］沖縄県南城市

島医者・山医者・里医者育成プロジェクトとは？

琉球大学と佐賀大学が共同して行う、文部科学省の補助事業「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」の一環で、新たな卒前教育プログラムを立ち上げ、医学生1年次から総合診療、救急、地域連携などに力を発揮できる医師育成を目指すもの。カリキュラムに地域医療コースを設け、「プライマリ・ケア演習」や、4年次から始まる臨床実習ではより多くの時間を離島・北部地域で経験することができる。

https://postcorona.skr.u-ryukyu.ac.jp/

とで、医療に携わることの責任感や使命感を強く意識することができる。背筋が伸びるよね。

松堂…それと離島診療所では、医師が孤軍奮闘するイメージでしたが、実際に体験すると、医師だけではなくて、事務の方、看護師の方、行政や消防団の方々、さらにオンラインで本島の病院の先生とも連携するなど、孤軍奮闘のイメージががらりと変わりました。

細田…そうだよね。離島診療所に赴任している先生同士がオンライン会議をしたり、何かあれば本島の先生に聞くこともできたり、一人で全部背負わなくてもいい環境

なんだなと感じました。一人で全て対応できる完璧な能力がなければ〝島医者〟にはなれないイメージでしたが、離島医療を経験しながら〝島医者〟として成長できるんだなと、そんなイメージに変わりましたね。

金城…各離島診療所や研修した親病院の指導医たちとオンラインでつながっているため、いつでも相談ができますし、島の人からもすごく大切にされているので、何かあれば助けてくれる。若い医師によって島の医療が守られていることを現地の方はすごく理解しており、それが医師にも伝わり高いモチベーションにもなる。離島医療で自分の実力を把握し、離島勤務後に自分の足りない部分を勉強するといった好循環サイクルによって、医師としてさらに大きく成長することもできます。

●

松堂…1年次のときと4年次以降で経験した離島医療のイメージも全然違っています。いろんなテストを経て知識も多くなっているため、学年が上がり離島医療を体験する度に、面白さがどんどん増していますね。

細田…知識が増えて視点も変わるから、新たな発見もある。過去の離島実習でのレポートや感想文もすごく役立っていて、読み比べると「1年次のときはこう思っていたんだ」「ここが成長したけど、ここはまだまだかな」とか、1年次から離島医療を体験できたからこそ知れたこと。それが、自分のさらなる成長へとつながる指針にもなっています。

松堂…僕はジェネラリストが基盤にある医師を目指しており、コミュニケーション力や患者さんの生活背景を把握する力も、住民との距離が近い離島だからこそ得やすく、離島医療を体験する度に、そうした力が徐々に身に付いてきたことを実感しています。

金城…最適な診断や治療に大切な、いわゆる〝生活を診る〟能力を養うためのチャンスを多く提供されることも地域枠学生の強み。沖縄県は東京のように特定領域の最先端医療しかやらない専門病院がなく、大学病院も含めて多くの病院が沖縄県の地域医療を守る〝最後の砦〟としての役割を担っており、離島や北部地域だけではなく、本島中南部でも地域医療をしている。沖縄県では多くの医師が〝生活を診る〟という地域医療マインドを持つことがとても大切です。

「地域枠」として沖縄の医療に携わる意義と価値は大きい

細田…それと地域枠の大きな魅力は、生まれ故郷の医療に貢献できることだと思います。沖縄県に生まれ、これまで沖縄のいろんな人に助けてもらったからこそ、今の自分がある。その恩返しとして、沖縄県の医療に貢献できることはとても嬉しく、幸せなことだと感じていますし、そんな自分の将来に期待感も大きいですね。

金城…以前、八重山高校出身の地域枠3年生と僕で、八重山高校に医学部・地域枠制度の説明会に行ったのですが、僕が話すよりも、地域枠学生の話にみんな目を輝かせている（笑）。八重山病院に見学にも行ったのですが、「八重山出身なんだね！」「早く来てよ、待っているね！」と、みんなに親しまれ、熱い声援を送られるなど、ホーム感がすごく良かった。東京出身の僕にはそれがなく、とても羨ましかったですね。自分の故郷を感じながら働くことができる。それも地域枠として沖縄の医療に携わる、ものすごく大きな価値だと思います。

Message

金城先生から医学生へメッセージ

遊びでも何でも、医学生のうちにしかできないたくさんの経験をして、人間の幅を広げてほしいと思います。また、貧困問題で病院にかかる人、病気より社会で生きることに悩む人がいることもぜひ知ってほしい。色々な人の生き様にふれることで想像力豊かな人になってほしいですね。みなさんは「100歳まで生きる世代」です。人生100年時代を“楽しく”生き抜くためには、一つの道で人生の長いステージを進むのではなく、複数のキャリアを歩み、仕事や学び、遊びを行き来する生き方が可能です。医学以外の事を追求する時間も大切であり、一見廻り道でも新しいことにどんどん挑戦してほしいと思います。

救急は“飽きがこない”女性医師も働きやすい科

そこにいるだけで、大きな安心感が生まれる。それが松平綾先生の魅力だ。

医学部には一般試験で合格したが、「県外で働くことに魅力を感じていなかったので」と地域枠で入学。初期研修は琉球大学病院で行い、救急の道に進むことを決めた。その理由を聞くと、「飽きっぽい性格だから」と笑う。

「救急は常に異なる状況に対応するため飽きがこない。〝教える〟ことも好きで、救急科には教育にも優れた先生がたくさんいることにも惹かれました。さらに救急科は、外科、外傷、集中治療、内視鏡など自分のしたい医療をアレンジでき、キャリアの選択肢も多彩。働き方もシフト制で融通が利き、ライフイベントのある女性医師にも最適です」

専攻医時代には自らの希望で当時の教授（久木田一朗先生）に話を通してもらい、日本一救急搬送の多い湘南鎌倉総合病院（神奈川県）でも修業をした。2023年に沖縄に戻り、北部地区医師会病院に勤務。2025年に琉球大学病院救急科に復帰した。

「現教授の梅村先生も、『医局や沖縄の医療に還元してもらえれば好きにしていい。要望があるなら何でも言って』という先生。言葉に甘えて好き勝手しています（笑）」

頼れる外来医長として組織づくりや教育に携わる

●

「琉球大学の救命救急センターは創設期にあり、大きくしていく醍醐味もあります」

松平先生は琉球大学病院に戻ると、目安箱ならぬ〝松平箱〟を設置した。2025年1月に救命救急センターに指定されたばかりの若い組織には不完全さもある。「困っていることがあれば何でも投書してほしい」とスタッフたちに呼びかけ、現場レベルで解決できない課題にはレポートを作成して執行部に提起するなど、一つひとつの声に真摯に対応し、改善を図っていったことで現場の動きもスムーズになった。さらに、専攻医向けの勉強会を定期開催するなど教育面でも新たな取り組みを始めた。

「教える際は、『それを知っているのは当たり前』という前提ではなく、基礎をゼロからいかに相手に分かりやすく伝えるかを意識しています。また、救急は教科書の知識よりも経験から得られる暗黙知が多くを占める分野。それをわかりやすく文章化するなど、誰もが追体験できるよう還元することも重要だと思っています」

松平先生にはもう一つの顔がある。中学時代から始めた「タロット占い」はプロ級でよく当たると評判だ。相手の悩みを聞き、それを解決するための最善策を提示することは医療にも通じている。しかも救急ではそれを迅速に行う必要がある。

「患者さんは、患者さんである前に一人の人間。真摯に向き合うことが大切です」

救急の逼迫した場面でも、一人の人間として患者に真摯に向き合い、意思疎通を図りながら不安を取り除く。人と人との信頼関係を築くことで、最適な治療に必要となる情報も患者から引き出すことができる。そこにいるだけで大きな安心感が生まれる松平先生の魅力は、そうした〝人間力〟から生まれている。

「将来は北部地区の地域医療に貢献したい」。そう語る松平先生の笑顔は、明日の沖縄の地域医療にも大きな安心を与えてくれるだろう。

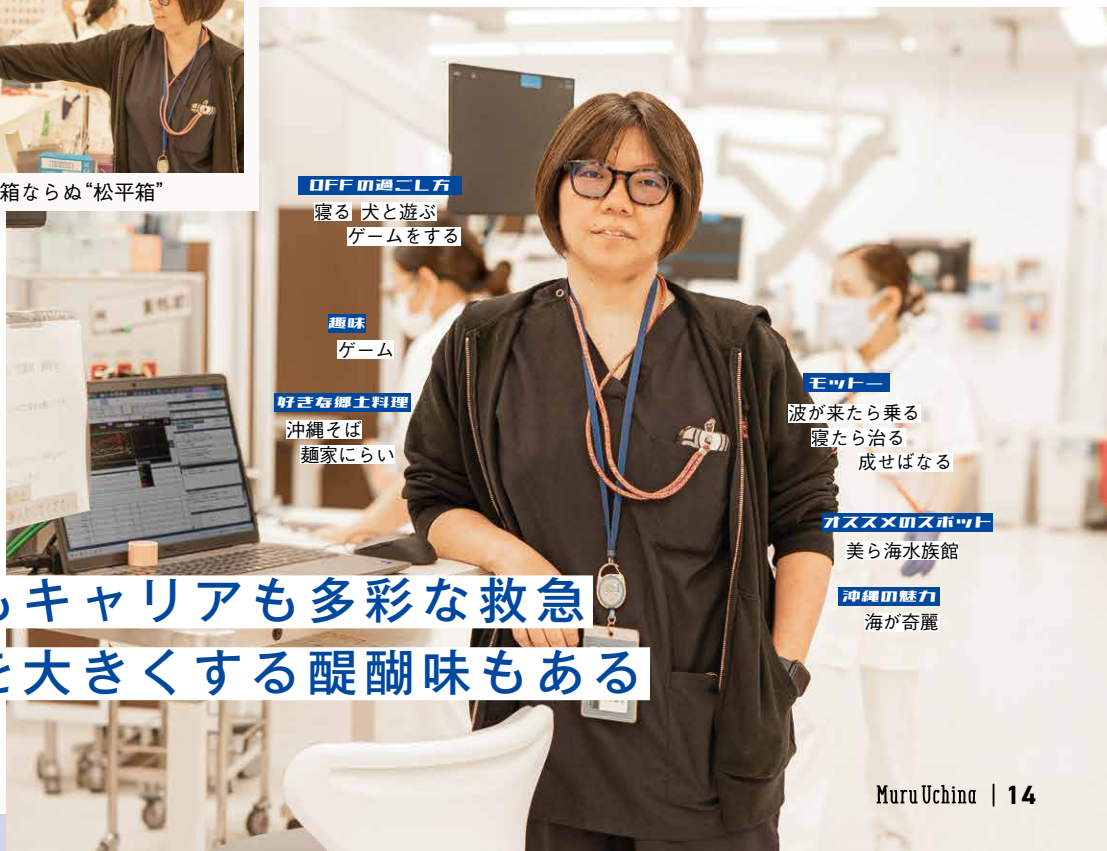
Interviewee
琉球大学病院 救命救急センター
特命助教・外来医長

松平 綾 先生
Aya Matsudaira

［出 身 地］沖縄県
［出身大学］琉球大学医学部
地域枠3期生（2018年卒）

目安箱ならぬ“松平箱”

大学卒業後、琉球大学病院で初期研修。琉球大学病院の救急科専門研修プログラムに進み、琉球大学病院の他、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の救急総合診療科・救命救急センター、北部地区医師会病院で救急医としての研鑽を積む。2025年より琉球大学病院救命救急センターの特命助教・外来医長。



OFFの過ごし方
寝る 犬と遊ぶ
ゲームをする

趣味
ゲーム

好きな郷土料理
沖縄そば
麺家にらい

モットー
波が来たら乗る
寝たら治る
成せばなる

オススメのスポット
美ら海水族館

沖縄の魅力
海が奇麗

#1 やりがいもキャリアも多彩な救急 若い組織を大きくする醍醐味もある

モットー
Think Globally, Act Locally

OFFの過ごし方
釣り

趣味
釣り　コーヒー焙煎

西表島のオススメスポット
祖納ビーチ
うなりざき公園（星空がきれい）

西表島の好きなお店
ゆんたく酒場　八重山

西表島の好きな郷土料理
イノシシやヤシガニ料理

西表島の魅力を一言でいうと？
沖縄で一番自然が豊かな所です！
住民の方も皆優しいです。

#2 島医者に必要なのは“完璧さ”ではなく医師としての“当たり前の姿勢”

Interviewee
沖縄県立八重山病院附属
西表西部診療所 所長
波平 郁実 先生
Ikumi Namihira
［出 身 地］沖縄県那覇市
［出身大学］琉球大学医学部 地域枠6期生
（2020年卒）

大学卒業後、琉球大学病院で初期研修（中頭病院との「たすきがけプログラム」）。総合診療医を目指すために、沖縄県立八重山病院の総合診療専門医プログラム「南ぬ島」に進む。専攻医3年目の2024年より、西表島の西表西部診療所に所長として赴任。

離島医療を支える“助け合い”の精神

台風で停電となった日の夜、診療所に痙攣患者が運ばれてきた。発電機を点けようとしたが故障している。非常事態だ。そんなとき、騒ぎを聞きつけた近隣住民たちが駆け付け、発電機を修理。電気は復旧し、その後無事患者さんの症状も改善した。

「再び灯った医療機器の明かりは、島に根付く〝助け合い〟の精神そのもの。住民に支えられた医療の力強さを実感しました」

波平郁実先生は、専攻医3年目に西表西部診療所に赴任。「地域枠」出身であり、沖縄県立八重山病院の総合診療専門研修プログラムに入り、「離島で一人医師の状況だったらどう診るのか」を常に想定しながら島医者になる力量を磨いてきた。

西表西部診療所は西表島の西部一体の約1500人（観光期は200人増）を診療対象とする。外来診療の他、フェリーやヘリ搬送、海上・山岳での急患対応では時に海上保安庁とも連携した救助も行う。さらに、巡回診療、舟浮地域への定期診察、集団予防接種、訪問診療、島内8教育機関の健診、健康講話など業務は多岐にわたる。加えて、住民が診療所で気持ちよく過ごせるよう毎朝のトイレ掃除も欠かさない。

「医療資源の少ない離島では全てを完璧にはこなせません。住民一人ひとりの状態や生活背景などを踏まえ〝やるべき優先順位をしっかりさせること〟を意識しています」

医療の質の担保には島全体をワンチームとする多職種連携も不可欠だ。波平先生は常日頃から、多職種や行政と電話、メール、出先での立ち話などで情報共有を行う〝ゆるい連絡網〟作りにも努めている。さらに、〝医師一人で悩まない〟ことも重要であり、八重山病院とは電話やオンラインで症例の相談・データ共有・振り返りを頻繁に行っている。

「見逃し三振より、空振り三振」が信条

診療では「見逃し三振より、空振り三振」を信条とし、「搬送の見極めでは、たとえオーバートリアージ判断だったとしても自分が恥をかくだけでいい。〝患者第一〟の判断を優先し、何事にもフルスイングを心掛けることが患者さんの命を守ることにつながる」と波平先生は語る。

離島では住民との近さから生まれる日常会話での〝天然のフィードバック〟も医師として成長させてくれる。波平先生は地域の青年会に入り、「節祭（しぶち）」といった伝統行事に参加するなど住民との交流を深めている。住民からは時折、旬な魚や果物などが届けられ、仕事終わりに趣味の釣りに出かけると船も出してくれる。赴任当初は残業することも多かったが、患者背景の把握や知識の蓄積によって急患発生率が低下し、定時退勤によって余暇も増えた。

ゴマフエダイがよく釣れます！

「離島は完璧な医師でないと無理だと思っていました。でも実際に来てみると、必要だったのは完璧さよりも、『学び続ける力』『周囲の人に頼る勇気』、そして『目の前の一人を大事にする』という当たり前の姿勢でした」

離島で得られる限られたリソースでの判断力や問題解決力、多疾患併存をトータルで診る力は都市部でも求められるスキルだ。離島には医師としての真の実力を培うための源泉がある。波平先生は自信を持って言う。

「離島経験は、どこに行っても大きな武器となるはずです」

Hospital Data

八重山病院附属西表西部診療所　〒907-1542 沖縄県八重山郡竹富町字西表694　https://yaeyamaweb.hosp.pref.okinawa.jp/information/shinryou/seibu/

マインドに惹かれ救急の道に 成長に携わるやりがいもある

「沖縄が好きで、家族や友達がいる沖縄から離れるという選択肢がない。地域枠の離島やへき地医療への従事義務は、僕にとってものすごくポジティブで魅力ある制度でした」

琉球大学病院救急科の専攻医である城間恵介先生は、地域枠の出身だ。初期研修は、医師としての幅広い基盤づくりをしたいと、琉球大学病院の〝たすきがけプログラム〟で、県立南部医療センター・こども医療センターでも研修をした。

救急の道に進んだのは、研修ローテーションでどの科も楽しく決め切れなかったことも理由だが、最も心を動かしたのは救急科の梅村武寛教授のマインドに惹かれたことが大きい。梅村教授は城間先生にいつもこんな話をしていた。

――琉球大学の救急を絶対に高度救命救急センターにする。沖縄県内の救命救急センターを支える沖縄県の最後の砦としてここを大きく育てたい。

「その船に僕も乗りたいと思ったんです」

2025年1月に新築移転した琉球大学病院では救急対応力の強化が図られ、県内4つ目の救命救急センターに指定。ハード面の充実により救急受入れ態勢も拡大し、救急科病棟(20床)も完備されたことで入院管理も可能となるなど、経験できる症例や手技の幅も広がった。

「それと、ここは海が近くて眺めもすごく良い。1歳の息子を院内保育園に預ける前に、敷地内を一緒に散歩しながら出勤できることが幸せ。当院の救命救急センターも言うなれば息子と同じ歳。一緒に成長していく過程を目にする楽しさと、成長に携わる大きなやりがいを感じています」

●

城間先生は専攻医1年目から救急外来リーダーとして外来の責任を担い、救急スタッフへの指示、他科への調整の他、救命病棟の入院患者管理や研修医、医学生への指導・教育にも携わっている。

「上の先生方の万全なバックアップのある安心の環境下だからできること。何かあれば一緒になって考え、問題を解決してくださる。現場でストレスフリーに仕事ができるのも上の先生方のおかげです」

琉球大学病院は連携施設が多く、近隣の在沖縄米国海軍病院との連携も県外にはない特徴だ。城間先生は沖縄県ーハワイ医学教育フェローシップに参加しハワイ大学医学部で独自の教育プログラムを発表、聖路加国際病院(東京都)でも4か月間、救急の研鑽を積んだ。

「沖縄が大好きで外に出たくないと言っていたのですが、梅村教授に『地域枠医師として沖縄を愛して、沖縄の医療を良くしたいのだったら、外に出るべきだ』と言われたんです」

重篤疾患を中心に対応する大学病院の救急とは異なり、聖路加国際病院では一般的な病態患者もひっきりなしに訪れるため、よりシビアで迅速なトリアージ能力が試された。城間先生はそこで学ぶ研修医や専攻医の誰よりも質問をし、知識やスキルをどんどん吸収していった。外で得た知識やスキルを還元することで沖縄の医療が発展する。それも沖縄の医療に貢献する地域枠の大きな役目である。未来の沖縄県の救急医療の発展・進化のために、地域枠出身の城間先生が果たす役割は大きい。

県外の救急医療も経験 若きリーダーとして活躍

Interviewee

琉球大学病院 救命救急センター
専攻医

城間 恵介 先生

Keisuke Shiroma

[出 身 地] 沖縄県浦添市
[出身大学] 琉球大学医学部
地域枠7期生(2021年卒)

大学卒業後、琉球大学病院で初期研修(県立南部医療センター・こども医療センターとの「たすきがけプログラム」)。琉球大学病院の救急科専門研修プログラムに進み、琉球大学病院の他、聖路加国際病院(東京都)の大規模ER型救命救急センターでも経験を積む。専攻医3年目。

モットー
自己分析を繰り返す
他人と比べない

趣味
ゴルフ

好きな郷土料理
沖縄そば いしぐふー

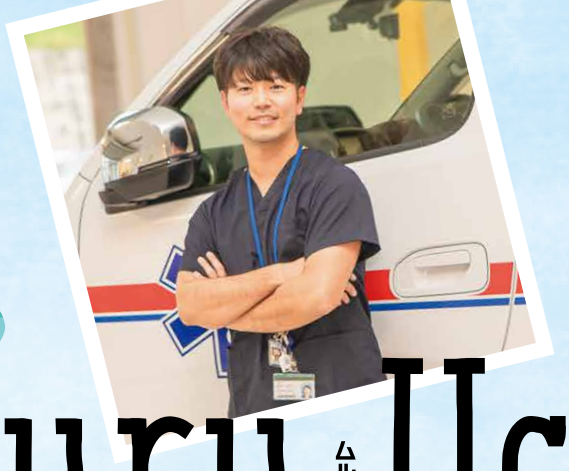
オススメのスポット
北谷のアメリカンビレッジ
亜熱帯サウナ

オススメのイベント
オリオンビアフェスト

OFFの過ごし方
1歳の息子と妻と散歩や買い物
ゴルフ

沖縄の魅力
人のあたたかさ。「なんくるないさー」という言葉がありますが、僕はこれを“お互いのミスを許し合おう”という優しさの言葉だと思っています。

#3 沖縄を愛する「地域枠」医師として 沖縄の救急医療の発展を担う



Muru Uchina ムルウチナー

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

「Muru Uchina（ムルウチナー）」第14号をお届けしましたが、いかがでしたでしょうか。
沖縄県地域医療支援センターは医師の地域偏在解消を目的とする組織です。
この冊子で少しでも私たちの想いをお伝えすることができれば幸いです。
ご意見・ご感想などお待ちしております。

発　行

琉球大学病院
沖縄県地域医療支援センター
Okinawa Community Medicine Support Center

〒901-2725
沖縄県宜野湾市字喜友名1076番地
TEL：098-894-1401
E-Mail：chi@w3.u-ryukyu.ac.jp
https://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp/

ムルウチナー バックナンバー

Vol.1

Vol.2

Vol.3

Vol.4

Vol.5

Vol.6

Vol.7

Vol.8

Vol.9

Vol.10

Vol.11

Vol.12

Vol.13

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina ムルウチナー

2026 Vol.14

琉球大学病院
沖縄県地域医療支援センター
Okinawa Community Medicine Support Center

〒901-2725 沖縄県宜野湾市字喜友名1076番地
TEL：098-894-1401
E-Mail：chi@w3.u-ryukyu.ac.jp
https://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp/

編集制作　【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社
ディレクター・デザイン・撮影：勝又シゲカズ（BTTB inc.）文：田口素行

琉球大学病院 沖縄県地域医療支援センター